

9

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
中根 長年 な かね な が と し	男 性	8 6 歳	2 1 歳	富岡中部

- ① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。
埼玉県所沢で、飛行機の整備をしていた。
- ② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。
所沢の飛行場で、指令を聞いて知った。
- ③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子
負けるとは思っていなかったので、信じられなかった。
- ④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「厳しかった軍隊生活」

私が出征したのは、昭和19年12月1日でした。大ぜいの人に寄せ書きをもらった日章旗をタスキのように肩にかけ、富岡国民学校に集合しました。

村人や親せきをはじめ、小学生もみんな集まりました。召集されたのは4人でしたが、一人一人力強くあいさつをしました。



▲ 中根さん所蔵の出征旗

「国のために力いっぱい戦ってきます！」

と言ったように思います。清水野小学校の正門まで送ってくれました。小学生は楽隊でラッパを演奏し、軍歌も歌ってくれました。小旗を振りながら、「♪天にかわりて不義を打つ～」という軍歌だったように記憶しています。

清水野小学校から新城駅まで歩き、豊橋、名古屋を歩いて新潟県まで行きました。高田の東部162部隊という教育隊に入隊しました。わずか3ヶ月でしたが、その間、一人前の兵士にさせるための厳しい訓練を受けることになりました。

朝は6時起床、私は第1班だったので、整列や集合は誰よりも早くしなければなりません。「点呼」の合図がある前に、毛布はきちんと真四角にたたんで積み、木のフタできちんと計るように揃えておかないと叱られました。

洗たくの時間は、設けられていないので大変です。6時の起床と洗面の時に洗うしかないので。「兵隊、要領を本分とすべし」と言われ、時間の使い方を工夫したものでした。不潔にしていると、点呼の時に衾布*1を引きちぎられます。衾布は、もし負傷した場合に三角巾として使うためのものです。だから、いつも清潔にしていなければならないということでした。

*1 軍衣のえりの内側にぬいつけて、えりの汚れを防ぐ布でひんぱんに取り替えて使用された。

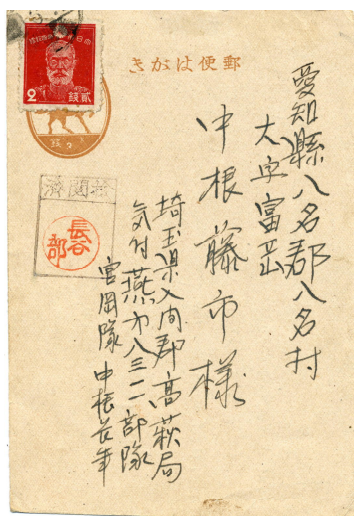
夜は8時消灯。消灯ラッパが鳴ると、すぐに毛布に入らないと憲兵に木銃*1で突かれました。ある時、体の大きな兵士が残菜をあさって食べたことがあります。普通の量では、食事が足らなかったのでしょうか。それが見つかり、その兵士は上官になぐられ、シャツのボタンを全部引きちぎられ、「営倉」とよばれていた独房のような所に、1週間一人で閉じ込められました。

ごはんは、こうりゃん飯でした。赤味があったので、村の人は赤飯とまちがえてうらやましがられましたが、とんでもない。おいしいものではなく、米のご飯が食べたいといつも思っていました。

ビンタはしょっちゅう*2でした。自分が食事当番の時、意地が悪くて気に入らない兵士の分を少なくつけたら、「人を差別するな」と言われ、張りとはばされました。一つの班が10人ほどでしたが、失敗や粗相があると班全体で責任を負うところが、当時のやり方でした。

私はその後、茨城へ配属され、20年5月頃には埼玉の所沢に移りました。燕第8311部隊宮岡隊に所属し、そこでは、飛行機の無線の整備をしていました。ここには兵舎がなく、民家や集会場に分散して宿泊していました。私は、同じ班の5人で農家の2階に分宿していました。この頃になると、アメリカの飛行機が上空を飛ぶようになり、飛行場に飛行機を並べられなくなって、山の中に飛行機を隠していました。5機ぐらいだったと思います。最後の本土決戦に備えていたのですが、終戦になりました。

私は、直接爆撃も受けなかったし、戦闘にも参加しなかったので運がよく、今もこうして元気に働いています。厳しかった軍隊生活や食べたいものも食べられなかった経験が、がまんすることや忍耐の大切さを教えてくれたように思います。



▲ 中根さんが送った軍事郵便



▲ 当時使用した奉公袋

奉公袋には、次のような物を入れました。

- ・軍隊手帳、勲章、記章
- ・各種の証書
- ・召集令状
- ・貯金通帳など

*1 戦時中、訓練のために使われた木でできた銃。

*2 軍隊では兵士をよくなく、兵士に上官への絶対服従をたたき込んだ。